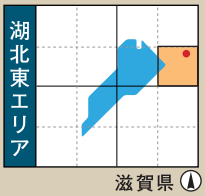
NO.033

史跡

国指定

京極氏遺跡ー京極氏城館跡・弥高寺跡ー

伊吹町上平寺・弥高　平成16年2月27日指定



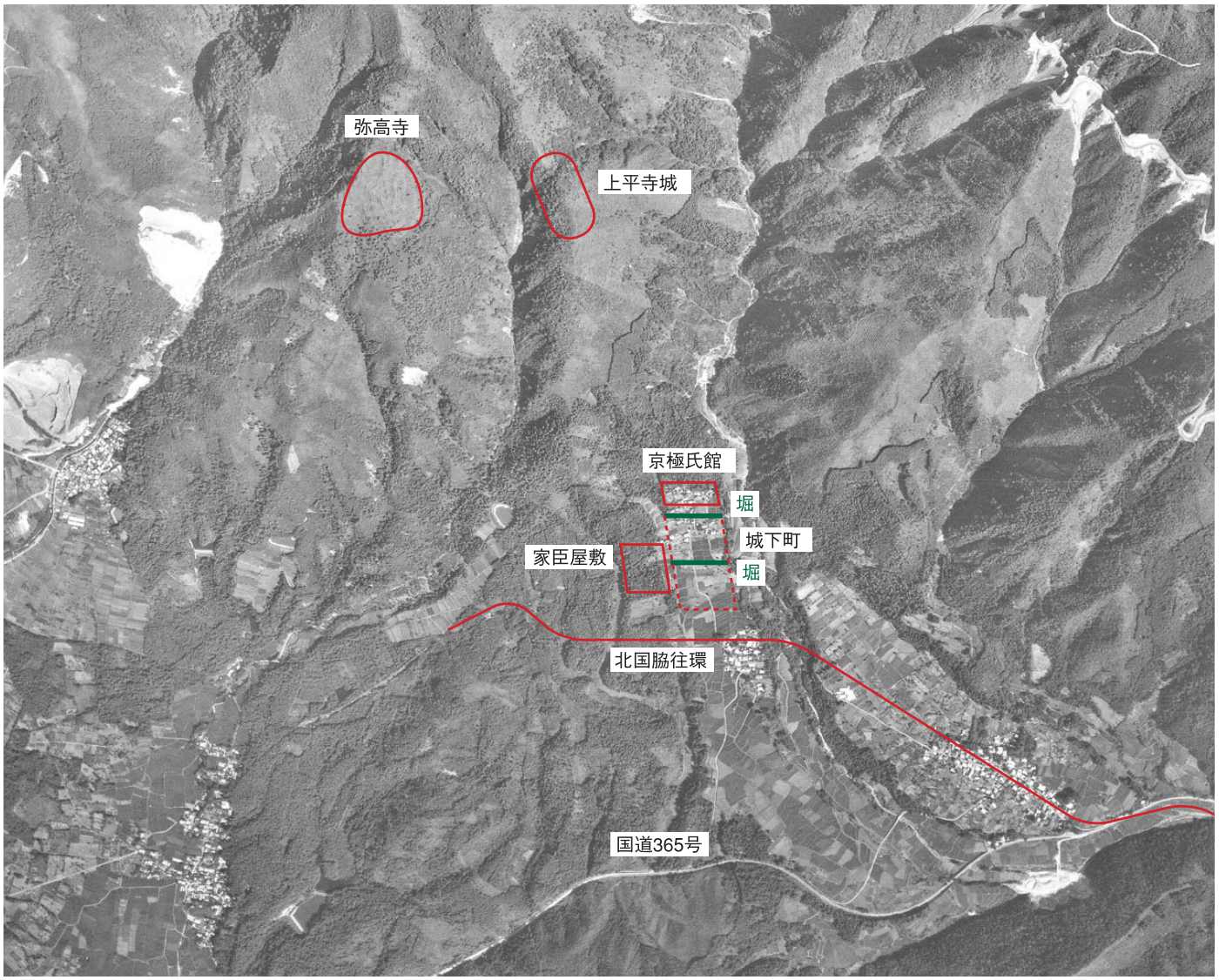
伊吹町上平寺地区・弥高地区に残る京極氏関連の遺跡は、永正2年（1505）に一族の内紛を収め、京極氏の力を取り戻した京極高清が北近江の支配のために整備した施設の遺跡です。庭園のある守護館、重臣屋敷、城下町、詰の山城、城郭として利用した山岳寺院が良好に残る、全国的でもまれな遺跡群です。

当時のできごと	
1603年	徳川家康が江戸幕府を開く
1635年	参勤交代が制度化する
1802年	十返舎一九が「東海道中膝栗毛」を著す

京極氏について

京極氏は、近江源氏佐々木氏の分流で、仁治2年（1241）に佐々木信綱の4男氏信が、北近江の愛知川以北6郡と柏原（山東町）の館を与えられ、京都にあった屋敷にちなみ「京極氏」と名乗ったことに始まります。室町時代には京極導誉の活躍により、江南の六角氏を圧倒する時期もあります。また、京極持清は、文明元年（1469）から近江一国の守護となり、その力をさらに伸ばしました。

応仁の乱後は戦国大名としての道を歩み始めますが、一族の内紛により力を落とし、これを収めた京極高清の代に至り、上平寺館を拠点に北近江を支配します。しかし、その後、家臣の浅井氏が台頭し、京極氏の政権はしばらく歴史の舞台から消えることになります。



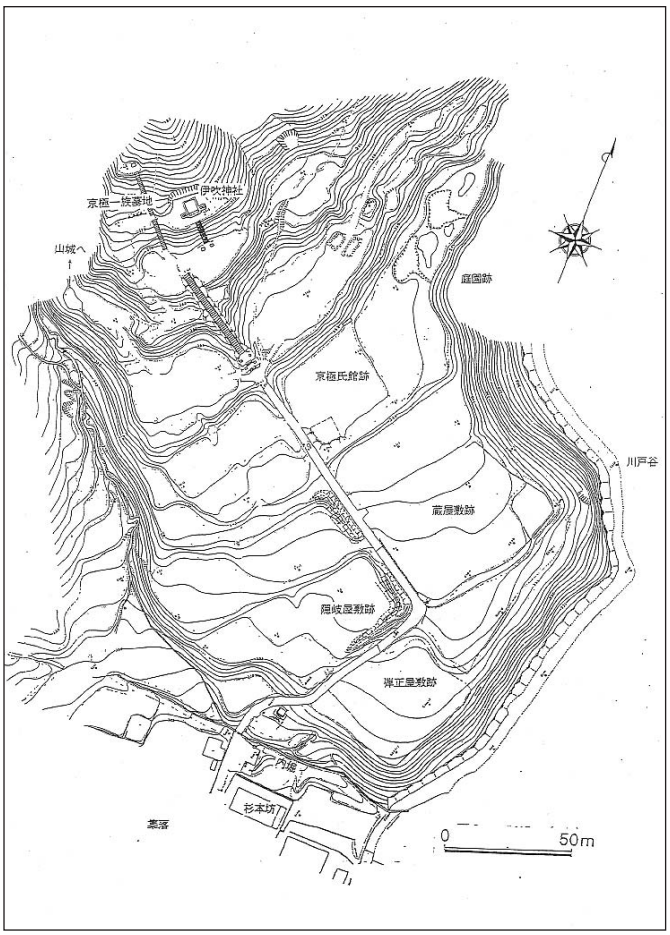
京極氏遺跡の位置関係（昭和30年代）

京極氏館

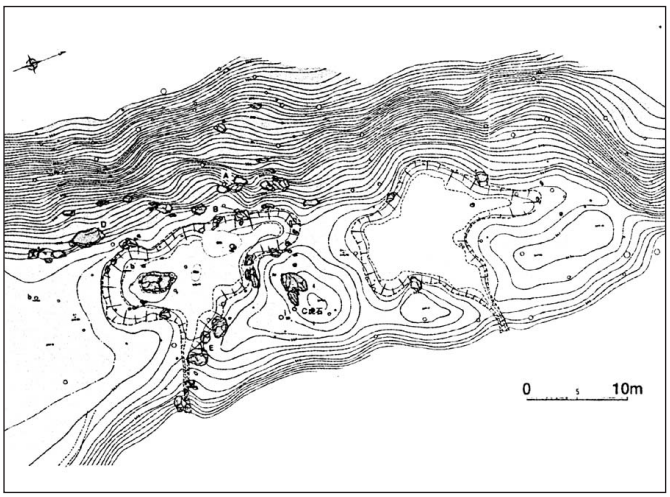
京極氏を中興させた京極高清が、北近江支配の拠点として整備した館跡です。高清は、鎌倉時代以来の京極氏の拠点であった柏原の館を廃して、新たに、この居館とともに家臣屋敷や城下町を造営しました。また、館には、領国支配の儀礼の場としての庭園が造られ、その背後の山上には、有事の際に用いる山城を整備しています。このような、居住空間（館）、儀礼の場（庭）、防衛空間（城）の構成は、幕府の御所や、細川管領邸を模したもので、京極氏が幕府と同質の公権力を持っていたことを示しています。

京極氏館は大永3年（1523）家臣団の造反により落城し、そのときに廃されたと考えられます。

館の遺跡は、上平寺集落の一番上にあり、城下町とは内堀により画されます。現在の伊吹神社の境内が館跡で、東西約170m、南北約250mの規模です。伊吹神社への参道沿いに屋敷地が配され、「弾正屋敷」「隠岐屋敷」「蔵屋敷」などの地名が残ります。伊吹神社の鳥居の右側下段が京極氏の「御屋形（おやかた）」で、奥行き約54m、幅約35mの広大な敷地を占め、その奥に庭園の遺構が残ります。



京極氏館平面図



京極氏庭園平面図

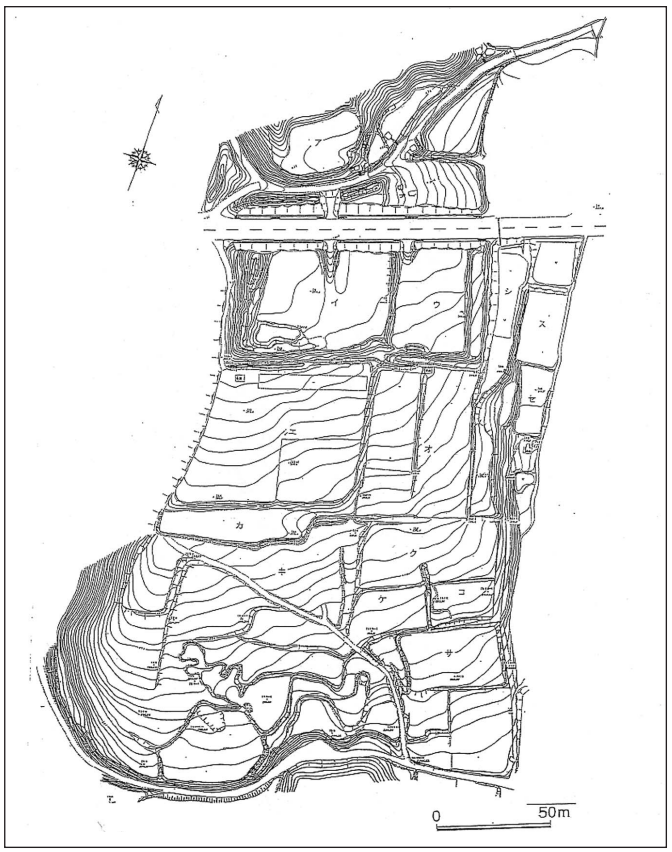
京極氏庭園

京極氏庭園は、京極氏館の整備に伴い京極高清によって作られたものと考えられ、作庭の時期が特定できる守護大名の庭園として、全国的にも貴重です。庭園の手前と奥に二つの池があり、池の中には平らな石を据えた中島があり、庭園の中央には主景となる巨大な立石が配されます。その他、伊吹神社へ通じる斜面上にも多数の景石を配しています。残念ながら後世に多数の石が抜き取られてしまい、往時の姿を完全にはとどめていませんが、池泉鑑賞式の庭園で、館部分には庭を観賞するための建物があったはずです。

この時代の庭園は、単なる鑑賞や遊興の場だけではなく、武家の儀礼の場の舞台装置として重要な役割を持っていました。今後予定されている調査により、守護大名の文化が蘇ることが期待されます。


京極氏庭園に残された景石


京極氏庭園に残された景石



家臣屋敷平面図

城下町と家臣屋敷

最後のページに示した「上平寺城絵図」の描写によると、京極氏館の前面には城下町が広がり、内堀のすぐ外に「諸子屋敷（武家屋敷）」、その南に「町屋敷（領主に直属する商工業者）」、外堀を隔て「市店民屋（一般領民の店や家）」があったようです。

京極氏館の城下は、東側を藤古川の深い谷、西側は家臣屋敷の並ぶ尾根と、要害谷に守られ、南側を外堀で遮断するという「総構（そうがま）え」の形をとり、さらに城下の南端には中京と湖北、北陸を結ぶ要路北国脇往還を取り込んでいます。

家臣屋敷

家臣屋敷は、京極氏館跡の南西に張り出した高殿と呼ばれる尾根上にあります。現在も三方を土塁で囲まれた屋敷割りを見ることができます。絵図にはここに「若宮」「加州」「多賀」「浅見」「黒田」「西野」の6人の名を見ることができます。彼らは、それぞれの本拠地に屋敷を構えていた京極氏の有力被官ですが、上平寺城下にも館が与えられていたことがわかります。


城下町の井戸

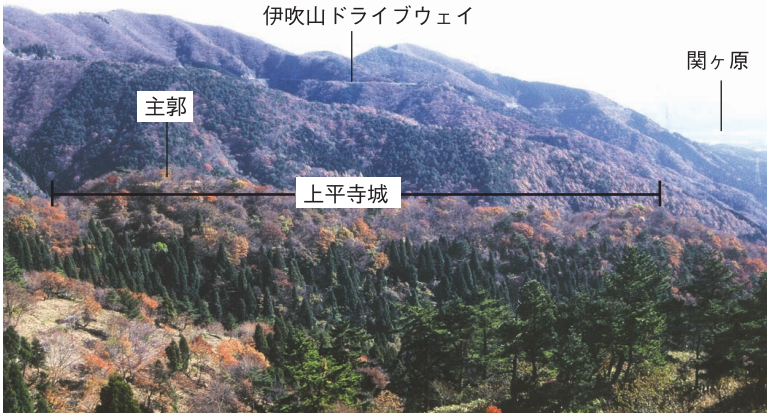

若宮屋敷の土塁


砂利敷きの道路跡

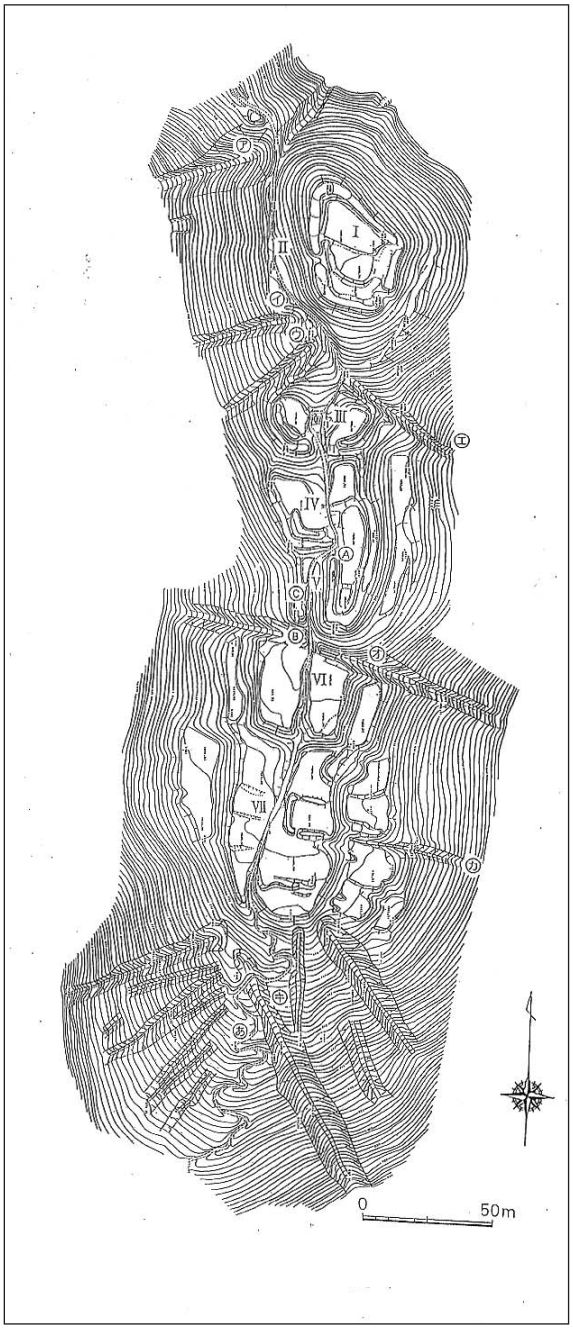
上平寺城

京極高清が山麓に館を構えたときに、戦いに備えた「詰の城」として整備したのが上平寺城です。大永3年に京極氏館は落城しその役割を終えますが、上平寺城は北国脇往還を見おろす位置にあり、北近江と近江、美濃国境、さらには関ヶ原方面まで見渡すことができる立地の重要性から、近江、美濃の境目の城（学習シートNo.060：鎌刃城跡）として機能します。特に、元亀元年（1570）には浅井長政が美濃より侵攻してくる織田信長に備え、同盟軍である朝倉氏の築城技術を導入して大きく改造しています。この時、城番の堀秀村と樋口三郎兵衛は、信長に内応して戦わず開城してしまい、この時に城も廃城となったと考えられます。

現在見られる遺構はこの時のもので、尾根を断ち切る巨大な空堀や、放射状に堀を巡らす畝状竪堀により周囲を守り、尾根上に土塁で囲んだ郭を配す、典型的な中世の山城の遺構です。



弥高寺跡から上平寺城を望む



上平寺城平面図


大堀切

京極氏と弥高寺

弥高寺は、伊吹山四ヶ寺に数えられる典型的な山岳寺院（学習シートNo.059：弥高寺跡）ですが、上平寺城と谷を挟んで対面する位置にあり、寺院としてばかりではなく、城郭としても機能していたようです。

城郭としての弥高寺に関しては、京極氏の内紛が続いた15世紀末、明応4年（1495）に京極政経が弥高寺に軍を進め、翌年には対立する京極高清が弥高山に布陣していることが記録に見え、この頃、弥高寺は京極氏の出城のような役割を果たしていたと考えられ、高清が京極館の整備をした際にも、この機能は受け継がれたものと考えられます。

本坊の背後には、寺とは思えない規模の巨大な堀切があって守りとしています。また、坊跡群の前面にある大門は、一部に石垣を用いた虎口構造となっています。さらに、平成15年に行った測量調査では、本坊背後の大堀切りに接続する竪堀群が新たに発見された他、大門の前面の斜面上にも巨大な竪堀が幾条も配されているのが見つかりました。これらの調査成果から、弥高寺が、山城の一部として高度に城塞化されていた様子が明らかとなってきました。

京極氏の城郭は、南北朝時代の太平寺城を始め、上平寺城、勝楽寺城（甲良町）、弥高寺と、寺院と重複しています。これは単に山岳寺院の施設を縄張りの中に取り込もうとしただけではなく、領民の崇拝する聖地に城を構えることにより、領民に領主権を認めさせる意味があったのかも知れません。



上平寺城から弥高寺跡を望む



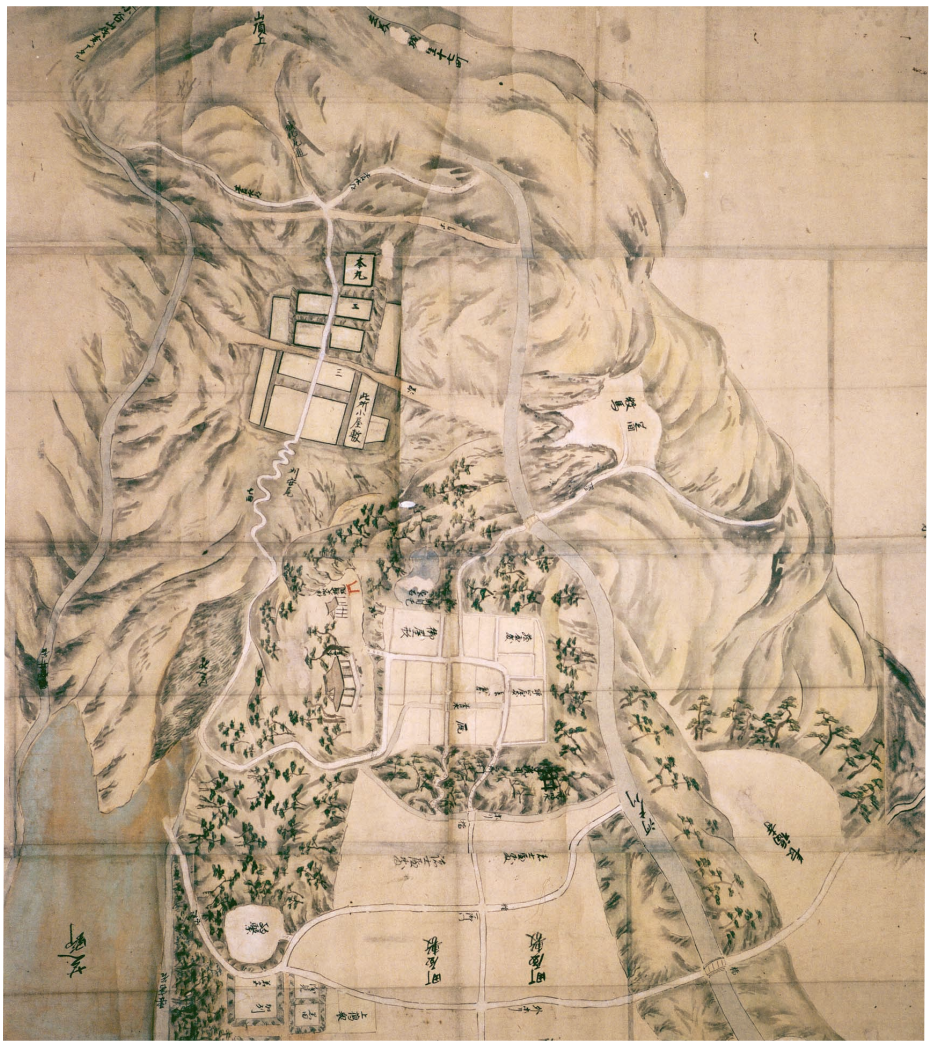
大門の跡



本坊　背後の大堀切



弥高寺跡測量図



上平寺城絵図

上平寺城絵図

この絵図は、江戸時代の初期に描かれたものと考えられています。製作の経緯は明らかではありませんが、京極氏館が廃された100年後に、残された遺構を忠実に書き留め、これに伝承を加え作成したもののようです。

上平寺は、戦国時代の北近江に初めて現れた都市で、この絵図は、都市の中核をなす守護館の姿を描いた、貴重な資料です。

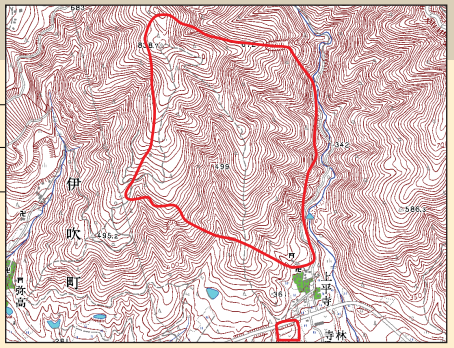
関連する文化財

清滝寺京極家墓所（山東町）	学習シートNo.032
勝楽寺城跡（甲良町）	ばさら大名として名高い京極導誉の菩提寺とその城
下坂氏館跡（長浜市）	京極氏の家臣下坂氏の館跡。当時の遺構が非常によく残る
大原氏館跡（山東町）	京極氏の家臣大原氏の館跡。土塁が残る

もっと深く知りたい

伊吹山文化資料館	☎0749-58-0252	坂田郡伊吹町春照77
安土城考古博物館	☎0748-46-2424	蒲生郡安土町下豊浦6678
山東町柏原歴史資料館	☎0749-57-8020	坂田郡山東町柏原2101

京極氏遺跡ー京極氏城館跡・弥高寺跡ーへのアクセス　JR東海道本線　柏原駅下車



【参考文献】〔京極氏の城・まち・寺〕伊吹町教育委員会〔上平寺遺跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会〔上平寺遺跡発掘調査報告書〕伊吹町教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月